

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第18号(2004年1月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001943

国語研の窓

18号

平成16年1月1日 第18号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会
〒115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14
電話 03-3900-3111 FAX 03-3906-3530
URL <http://www.kokken.go.jp/>



国立国語研究所 1号館及び4号館（左手前）
（2003年11月、研究所北東側の国立スポーツ科学センターから）

もくじ

暮らしに生きることば	1
研究室から：第2回「外来語」言い換え提案をめぐって	2
「ことば」フォーラム報告（第16回、第17回）	4, 5
ことばQ&A	6
韓国国立国語研究院と学术交流合意を締結	6
新刊	6
大学院教育への参画	7
刊行物紹介：	
『国語年鑑2003年版』『分類語彙表―増補改訂版―』	7
お知らせ：「ことば」フォーラム、国際シンポジウム	8

暮らしに 生きる ことば

「お出かけですか」「ちょっとそこまで」

ある留学生から、大家さんのおばさんはとてもよくしてくれるのだけれど、外出時に顔をあわせるたびに「あら、お出かけ。どちらへ」と聞かれ、行き先をチェックされるのが嫌だ、と相談されました。「お出かけですか。どちらへ」「ええ、ちょっとそこまで」これは日本語ではよくあるやりとりです。「お出かけですか。どちらへ」は行き先についての質問というより、相手への関心を表す言葉と言えます。ですから、「ええ、ちょっとそこまで」のような、具体的な情報がない答えでもかまわないのです。大家さんの言葉は「行ってらっしゃい」と同じような挨拶だから、行き先をはっきり言わなくても大丈夫だということ、留学生も納得していました。

仕事の打ち合わせをしたり、授業を聞いたり、レストランで注文をしたり、私たちは言葉をやり取りすることで必要な情報を伝えます。それと同時に、人間関係を作るためにも言葉を使います。挨拶

は、まさに関係作りための言葉と言えます。

良好な関係作りのためにどのような言葉のやり取りをするかは、文化によって違いがあります。「いいお天気ですね」など、日本人は挨拶がわりに天気をよく話題にしますが、中国や韓国では「ご飯を食べましたか」が挨拶になります。初対面の相手と話すときに、例えば年齢や出身地を話題にするかなど、どんな話題が適切かといったこともさまざまです。

また、決まった表現をよく使うか、その時々で違った言い方をすることを好むかという違いもあります。「おはよう」の代わりに相手の服をほめたり、お茶を入れてくれた相手に「ありがとう」ではなく「今日何かいいことでもあった？」とちょっとした冗談など、ひと工夫した表現を使うことを好む言語文化の人々からは、日本語の定型表現が物足りなく感じられることもあるようです。

決まり文句に心を込めるのでも、工夫を凝らしたセリフで気持ちを伝えるのでも、相手と良い関係を築いていくために、言葉を交わすことを大切にしていきたいものです。（石井 恵理子）

第2回「外来語」言い換え提案をめぐって

●これまでの経緯

国立国語研究所では、平成14年8月に「外来語」委員会を設置し、国の省庁の行政白書や新聞など、公共性の高い場面で使われていながら、一般への定着が不十分で分かりにくい外来語について、分かりやすく言い換えたり、説明を加えたりするなど、言葉遣いを工夫する提案を行ってきました。

平成14年12月には第1回「外来語」言い換え提案の中間発表を行い、その後各方面から寄せられた数多くの御意見を生かしながら、平成15年4月に62語を対象として最終発表を行っています。第1回の最終発表については、本紙16号に詳しい紹介記事があります。

委員会では、ほぼ半年に1回、数十語程度を取り上げて、検討結果を公表することにしています。今回のこの欄では、平成15年11月に47語を対象に行った、第2回言い換え提案の最終発表の概要を紹介します。

●中間発表から最終発表へ

第2回言い換え提案の中間発表は、最終発表の3か月前、平成15年8月に行いました。この中間発表は、第1回最終発表の提案形式をほぼ踏襲しています。しかし、その後の反響から、最終発表では、提

案の背景や目的について、改めてはっきりと述べる必要があることを強く感じました。

重要な点は、①公共性の高い場面で外来語をむやみに多用すると、円滑な伝え合いの障害になるので、②特に官公庁、報道機関などでは、それぞれの指針に基づいて、言い換えや注釈など受け手の理解を助ける工夫をする必要があり、③委員会の提案は、そのための基本的な考え方と基礎資料を具体的に提供するものである、ということです。

また、中間発表に対して寄せられた御意見を整理するなかで、特に、次の二つの点に言及する必要を感じました。一つは、言い換え語が外来語に対するものであって、原語である英語等の訳語ではないこと、もう一つは、新たに言い換え語を造語して提案することの意義についてです。

●分かりやすくするための留意事項

言葉遣いの工夫として、言い換え語と説明付与のどちらが有効であるのか、一概には決められません。分かりにくい外来語と言っても、個々の外来語にはそれぞれに固有の背景事情があるからです。

一つ一つきめ細かな対応をすることが大切ですが、どんな場合でも常に念頭におくべき留意事項として、委員会では次の6項目を掲げました。

○ バーチャル 全 体 60歳以上
★★☆☆ ★★☆☆

言い換え語 仮想

用 例 テレビゲーム、携帯電話の普及などによって、子どもの実生活が分断され、分断された子どもの世界に、
仮 想 の
バーチャルな世界が侵入してきたのである。

意味説明 現実そっくりにつくられ、あたかも現実の世界であるかのような様子

手 引 き ○英語 virtual は、表面上は違うが実質そのものである様子を意味し、「実質上」などと訳されている。
外来語「バーチャル」は、現実そっくりではあるが仮想の世界である様子の意味で用いられ、英語と大きくずれた意味で受け入れられており、言い換え語としては「仮想」が適当である。

○「バーチャルな」には、用例に見るように「仮想の」を当てるとよい。

その他の言い換え語例 仮想世界

複合語例 バーチャルモール＝電子商店街 バーチャルリアリティー＝仮想現実、人工現実感

見出し語の後の星印は国民の理解度。★★☆☆は25%未満、★★☆☆は25%以上50%未満。

全体 60歳以上
★☆☆☆ ★☆☆☆
○ ノーマライゼーション

言い換え語 等生化 等しく生きる社会の実現

用 例 養護学校との情報交換やノーマライゼーションの理念を教職員や保護者、地域などに浸透させることを提言するものとみられる。

意味説明 障害のある人も、一般社会で等しく普通に生活できるようにすること

手 引 き ○これからの社会の重要な概念になると考えられ、概念の普及のためにも、分かりやすい言い換えや説明が必要である。

○これまで「共生化」と言い換えられることが多かったが、「共生」は、人間と野生動物との共生、多民族間の共生など、使われる分野が広くなり過ぎ、分かりにくくなる問題がある。「ノーマライゼーション」の意味概念をそのまま移し替えることのできる新語として、「等生化」を提案したい。どの言い換え語を使う場合も、当面は、説明を付与するなどの配慮が必要である。

○話し言葉では「等しく生きる社会の実現」のような言い換えも、耳で聞いて分かりやすい。

○「ノーマライゼーション」は、これまでの福祉が、障害者を一般社会から引き離して、特別扱いする方向に進みがちであったのに対して、すべての人が、同じ人として普通に生活を送る機会を与えられるべきであるという、新しい福祉の考え方を提唱する語である。

○この考え方にもとづいて、実際に福祉環境をきめ細かく整備していこうとする場合は、「福祉環境作り」と言い換えることも有効である。

○障害者だけでなく、高齢者などを含める場合もあるので、説明を付与する場合は、文脈に応じて工夫する必要がある。

その他の言い換え語例 共生化 福祉環境作り

- (1) 語による理解度の違いに配慮を
- (2) 世代による理解度の違いに配慮を
- (3) 言い換え語は外来語の原語に対するものではないことに注意を
- (4) 場面や文脈により言い換え語を使い分ける工夫を
- (5) 専門的な概念を伝える場合は説明を付け加える配慮を
- (6) 現代社会にとって大切な概念の定着に役立つ工夫を

これらのうち、今回新たに取り上げ、注意を喚起したのは、(3)の項目です。言い換え語については、外来語の原語に対するものであるという誤解が、しばしば見受けられます。外来語の意味・用法は、原語での意味・用法をそのまま反映しているわけではありません。むしろ何らかのずれが見られるのが普通です。前ページに示した「バーチャル」の例では、**手引き**の第1項目で、この点をはっきりと説明しています。

また、(6)の項目に該当するのが、上に示した「ノーマライゼーション」の例です。

委員会では、この現代社会の重要な外来語に対して「等しく生きる社会の実現」という意味で、「等生化」という言い換え語を新たに造語しました。この語が「ノーマライゼーション」の表す概念の担い手の一つとなり、その普及定着に役立つものと期待するからです。

●今後の展開

第2回言い換え提案の全文は、研究所のホームページ (<http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/>) で御覧いただけます。言い換え語の部分だけでなく、分かりやすくするための工夫という観点から、全体として御活用いただければ、幸いです。

委員会では、現在、第3回言い換え提案に向けて検討を開始しています。その候補となる外来語は、すでにホームページ上で公開し、言い換え語をはじめ数多くの御意見をいただいています。それらは、全て委員会での検討に生かされています。

なお、第3回は、中間発表を本年3月、最終発表を7月頃に予定しています。(相澤 正夫)

第16回「効果的なコミュニケーション — 間やリズムを上手に使おう — 」

昨年9月27日、広島国際大学国際教育センターにて第16回「ことば」フォーラムが開催されました。広島国際大学 言語・コミュニケーション学科との共催ということで、多くの学生さんも参加し、活発な会となりました。

今回のキーワードは「パラ言語」です。同じ表現でも言い方によって聞いた印象が随分変わってきます。「ありがとうございます」という感謝の表現も、言い方によってはかえって相手に不快感を与えることもあります。コミュニケーションでは、言葉の周辺を形作っている声の調子や間のとり方、リズムといった「パラ言語(周辺言語)」が重要となるのです。今回のフォーラムでは、パラ言語を多角的にとらえるため、「理論・分析・実践」の三つの立場から発表を行いました。学生さんが大活躍し会場を沸かせた「実践編」を中心に、簡単にご紹介しましょう。

「理論編」(高倉章男：広島国際大学)では、パラ言語の種類やコミュニケーションにおける役割について概観しました。理論というと少しとっつきにくい印象もありますが、小説や詩、コマーシャルといった身近なものを題材に説明することで、リズムやテンポ、抑揚といったパラ言語が、コミュニケーションにおいてどのような役割を担うのか、また読み手や聞き手にどのような印象を与えるのかということ、具体的にお伝えすることができたと思います。

次は「分析編」(小磯花絵：国立国語研究所)です。皆さんは、話しの最中で別の話題に移る時、いきなり次の話題を話し始めるのでしょうか、それとも少し「ポーズ(間)」を置いてから次の話題に移るのでしょうか。仮にポーズを置くとして、具体的にどのくらいの長さのポーズでしょうか。こういったパラ言語に関する具体的な疑問を持った時に役に立つのが、話し言葉のデータベースを調べるという方法です。発表では、国語研究所で作成中のデータベース『日本語話し言葉コーパス』(本紙17号で紹介)を利用して行われた、話題とパラ言語についての研究を取り上げ、パラ言語の詳細をどのように調べたらいいのか、調べることでどのようなことが分かるのか、といったことを、具体的に紹介しました。

最後は会場を大いに沸かせた「実践編」(久次弘子：広島国際大学)です。まず、コンビニで働いている二人の学生さんが前に呼ばれました。そして先生の指示で、普段の通りに「いらっしゃいませ」と

言ってみることにになりました。一人はとても威勢よく「いらっしゃいませ!」、もう一人はボソボソ声で「いらっしゃいませ…」。

ここから久次先生の「指導」が始まりました。おもむろに取り出したのはバスケットボール。これは久次先生独自の指導法で、「距離感」を体感するための小道具とのこと。ボールをポンと人に投げるとき、相手が遠いと込める力も強くなりますし、ボールも太鼓橋のように大きな弧を描きますね。逆に相手が近いと、ボールの弧は小さくなります。相手に言葉を掛ける時も理屈は同じというわけです。



ボールを使い距離感をつかむ

そこで、実際にボールを相手に投げ、ボールの軌跡に合わせながら、「いらっしゃいませ」と発話してみることにになりました。相手が遠い時には、少し大きめの声で抑揚も付け、最後は相手の手元にボールがすんと落ちるように声もすっと落ちる、という具合です。先生が実演してみると、確かにボールが相手に届くのと、「いらっしゃいませ」が言い終わるのが見事に一致します。「いらっしゃいませ」という言葉が相手の胸にしっかりと届いた印象を受けます。会場がわっと沸きました。一方学生さんというのは、なかなか先生のように言葉とボールが合いません。まだ距離感がつかめていない様子です。しかし何回か練習するうちに、だんだん合ってくるようになりました。私たち聴衆は、学生さんの発話がどんどん変化する様子を目の当たりにし、ボールを使った演習の効果を感じることができました。

またビジネスにおける上司と部下の会話場面を想定したロールプレイングも行われました。同じ受け答えでも、パラ言語の違いによって全く印象が変わってきます。広島弁を交えた先生の熱心な指導のもと、学生さんが様々なパラ言語を使い分け、見事に上司と部下を演じ切りました。会場から盛大な拍手を受け閉会となりました。(小磯 花絵)

第17回「方言の科学 — ことばのくにざかい 富山 — 」

第17回「ことば」フォーラムは、昨年11月3日14時から16時半にかけて、富山市の富山国際会議場において開催されました。参加者数は390人でフォーラムとしては過去最高の参加人数でした。



前半では以下の講演を行いました。

まず、はじめは大西の「方言の東西境界と富山」です。方言研究の世界で「東西対立」として知られている境界線に近い位置にある富山をめぐる最新のGIS(地理情報システム)技術も利用した地図を提示しながら東西対立の意味について話しました。

次は、富山大学の中井精一氏による「富山方言の地域差」です。富山大学では地元ならではの地域に密着した方言研究が継続されてきました。それをもとに富山県内の方言差をそこに住む人々の生活事実と重ね合わせる形で、具体的な地図を提示しながらお話いただきました。

前半最後は、大阪大学の真田信治氏による「社会構造と方言、その変遷」です。社会言語学者として著名な、また「とやま賞」受賞者として地元富山でもひろく知られている真田氏は、合掌造りで有名な富山県五箇山の御出身です。今回は研究の原点にもどっていただき、五箇山の伝統社会の変遷が方言にどのように反映されているかをお話いただきました。

以上で理解されるように、前半の講演は、全国的鳥瞰^{かん}から、次第にそこに暮らす人間に接近していくという流れをとりました。この流れは、参加された皆さんにもわかりやすかったように思います。

フォーラムの後半は、講演を受けてのパネルディスカッションです。このディスカッションは、会場からの質問を「質問票」で受け、それにこたえながら、講演者どうしが壇上で議論するという形で進行

しました。回収された質問票の数は、50枚以上にのぼり、残念ながら短い時間ではとてもすべてにこたえきれません。講演との関係を考慮した上で、10件程度にしぼって回答しながら、話題を深め、講演に盛り込めなかった内容も含めて、各講演者が話題を提供しつつ議論を深めました。

今回のフォーラムでは地元放送局、北日本放送のアナウンサー、相本芳彦さんに司会をお願いしました。相本さん自身が富山県の御出身であり、方言に強い関心をお持ちであったことは、フォーラムにとって幸いしました。パネルディスカッションの中で、富山の方言が話題になることが当然多かったわけですが、その際に、参加者の皆さんに「こんな言い方を知っていますか？」と投げかけたり、実際にマイクを向けて話をしてもらったりということでごやかな雰囲気を作り上げることに成功しました。和気あいあいとした中に研究所ならではの学術的な成果も展開するということが、フォーラムの本来の姿勢が貫かれたと自負します。

今回のフォーラムは「方言の科学」と題しました。これは19世紀の物理学者マイケル・ファラデーによる有名な科学啓蒙書『ロウソクの科学』のもじりです。実は、『ロウソクの科学』もファラデーの一般向け講演に基づきます。私たち、いや私はファラデーには及びもつきませんが、少しでも彼の姿勢にならおうと思い、このような題を付けてみました。副題を変えることでこれから先も方言をテーマにしたフォーラムを開催する際に利用できることもねらっていますが、さて、今後も継続できるでしょうか。

今回のフォーラムは、富山市教育委員会との共催とし、具体的には富山市立図書館が企画段階から御協力下さいました。北日本新聞社・北日本放送の後援を受け、また、富山大学人文学部中井研究室の皆さんにもずいぶんと手助けをいただきました。市教育委員会・市立図書館、また講演いただいた中井氏には、事前にかなり宣伝していただき、これらのお力添えが過去最高の参加者数、ならびに充実した内容という成功につながりました。この場を借りて、皆さんに感謝したいと思います。(大西 拓一郎)

「フォーラム」とは「広場」という意味の外来語ですが、国語研究所では参加者の方々と一緒に言葉について考えたり話し合ったりする機会を「ことばフォーラム」と名づけて、開催しています。

ことばQ&A

Q 質問 学校で方言を使うことが禁止されていたことがあるというのはほんとうですか？今はどうなっているのですか？

A 回答 明治期以降、全国共通のことばの普及を押し進める上で、学校での共通語教育が重視されるあまり、生活言語として定着していた方言の使用が学校で禁止されたことがあるのは事実です。例えば、沖縄県では、生徒が学校で方言を使うと、罰として「方言札」と書かれた板切れを首に掛けさせるというようなことがありました。

戦後の小学校学習指導要領を見てみると、方言使用を禁止しないまでも、共通語の習得を強調した表現が使われています。

昭和33年版では「小学校の第六学年を終了するまでに、どのような地域においても、全国に通用することばで、一応聞いたり話したりすることができるようにする」という記述があります。

昭和43年版以降平成元年版までは、「共通語と方言とは違いがあることを理解し、また、必要に応

じて共通語で話すようにすること」など、場面による使い分けに配慮した表現が用いられるようになりますが、やはり共通語の習得に力点がおかれているといえるでしょう。

それが、平成10年版では方言や共通語という表現自体がなくなっています。

それでは、学校で方言がどうなっているかという点、地域、場面、状況によりさまざまな使われ方があるというのが現状です。

一度は「方言札」まで導入した歴史を持つ沖縄県では、学習発表会で方言劇を取り入れる小学校が増えてきています。その際、方言指導者を招いて台詞の指導をしてもらっていることが少なくないようです。また、山形県三川町の中学校では、総合学習の一環として、地域の方言が学べる授業が選択できるようになっています。共通語の普及が進んだ現代では、いわゆる「伝統的方言」の多くは、日常語というよりも、継承すべきことばという色合いが濃くなってきているといえるでしょう。

(当真 千賀子)

韓国国立国語研究院と学術交流合意を締結

国立国語研究所は、昨年10月29日ソウルにおいて、韓国国立国語研究院と、研究・情報の交流及び協力事業を内容とした学術交流合意締結式を行いました。これは、一昨年10月の中国北京日本学術研究センターとの学術交流合意に続く二例目となります。

国立国語研究院は、1984年5月に、国語研究所の研究組織等になって設立され、語文規範の制定、南北における言語の同質性を回復する事業の促進など、国語政策形成のための基礎資料を提供し、韓国文化の促進に貢献する機関として精力的に活動しています。

締結式終了後は、両国内の外来語に関する状況、各研究所の現状と課題、将来構想などの情報交換を行うとともに、来る3月に国語研究所が日本で開催する国際シンポジウムへの参加を甲斐所長より要請しました。



合意書を取り交わす南
院
長[㊦]と甲斐所長[㊧]

新 刊

- 1 全国方言談話データベース
『日本のふるさとことば集成-第17巻 愛媛・高知-』
(国立国語研究所資料集 13-17)
2003年11月/国書刊行会/冊子 (A 5 判横組み286
ページ), CD, CD-ROM/本体6800円
- 2 国立国語研究所プロジェクト選書 2
『現代日本の異体字-漢字環境学序説-』
笹原宏之, 横山詔一, エリク=ロング 著
2003年11月/三省堂/A 5 判横組み 320 ページ/
本体2600円
- 3 『日本語科学 14』
2003年11月/国書刊行会/B 5判横組み122ページ/
本体3000円
- 4 『国語年鑑 2003 年版』
2003年12月/大日本図書/冊子 (A 5 判横組み676
ページ), CD-ROM/本体8000円
- 5 『分類語彙表-増補改訂版-』
2004年1月/大日本図書/冊子 (B 5 判横組み712
ページ), CD-ROM/本体4700円

■■ 大学院教育への参画 ■■

国立国語研究所では、平成13年10月から、政策研究大学院大学（新宿区）・国際交流基金日本語国際センター（さいたま市）と3機関連携の大学院プログラムを運営しています。修士課程（日本語教育指導者養成プログラム）と博士課程（日本語文化研究プログラム）とがあります。

修士課程は3年目に入っており、15年10月に第3期生9名を世界9か国（東南アジア・中央アジア・南米）から迎えて指導を続けています。院生は、出身国の機関や学校で日本語教育の中堅指導者としてすでに活躍している人たちです。それぞれの本務先で課題となっている日本語教育の教授法や教材などに関することから研究テーマに掲げて、1年間の集中したカリキュラムで研究を進め、16年9月の修士号取得を目指しています。国語研究所からも16名の所員が講義・演習・研究指導に当たっています。

さかのぼって15年秋には、第2期生9名全員が修士号を取得して修了し、出身国に帰りました。帰国後は、それぞれの本務先で仕事を再開し、修士課程在学中の成果を論文発表したり、講演で紹介したり

という活動を行っており、折にふれその状況を報告して来ています。修了後の業務や活動を通じて、また修了生相互のつながりを持続することを通じて、世界各地の日本語教育現場の人や情報の交流を深め始めています。

一方、博士課程は、15年10月に第1期の院生1名を中国から受け入れ、プログラムを開始しました。本課程は、日本語と日本語教育の知識・技能に熟達し、出身国での日本語教育を指導的な立場で支え展開していく人材を育成することを目標としています。この目標のもと、院生は3年間の在学中、国語研究所や関係機関の進める調査研究に主体的に参加したり、学会発表や論文発表を重ねたりしながら、博士論文完成を目指します。1期生の指導には、連携3機関のほか中国の大学教官も加わった指導教官グループが当たります。そのうち国語研究所は、博士課程院生を招へい研究員として受け入れて指導や研究環境の充実に努めています。

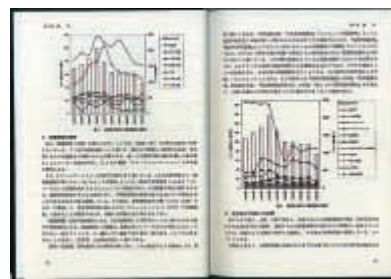
なお、この大学院プログラムに関する詳しい情報（次期募集要項も含めて）は、各機関のホームページに掲載されています。（他の2機関のホームページは国語研究所ホームページを通して御覧いただけます。）

（杉戸 清樹）



『国語年鑑 2003年版』

- 第1部 動向〔刊行図書の動向；雑誌文献の動向；総合雑誌記事の傾向；新聞記事に見る分野・話題の推移〕
 - 第2部 文献〔刊行図書一覧；雑誌文献一覧；総合雑誌／特集・連載・対談目録；ほか〕
 - 第3部 名簿〔国語関係者名簿；各学会・関係諸団体一覧；ほか〕
 - 第4部 資料〔第1回「外来語」言い換え提案；平成14年度文部科学省科学研究費等の交付状況；ほか〕
- 付録 CD-ROM



1954年の創刊以来日本語の研究情報に関する基礎的な文献として重用されてきた『国語年鑑』の構成が、2003年版から大きく変わりました。

○第1部「動向」を新設…第2部を資料とした文献の動向、及び本研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を資料とした社会における動向を紹介します。

○第2部「文献」に「総合雑誌／特集・連載・対談目録」を追加…日本語に関する内容を含んだ総合月刊誌の特集・連載・対談を、目録の形で一覧できるようにまとめました。

○付録 CD-ROM を添付…第2部のうち「刊行図書」「雑誌文献」のデータを収めました。

※『国語年鑑』のホームページ：<http://www.kokken.go.jp/katsudo/kanko/nenkan.html>

※御購入に関するお問い合わせ先：大日本図書 電話 03-3561-8679



『分類語彙表—増補改訂版—』

長い間現代日本語のシソーラス(類義語集)として使い続けられ、のちの語彙研究に大きな影響を与えた『分類語彙表』の増補改訂版ができました。初版(1964年刊。絶版)は、現代語研究の基礎資料として幅広く利用されました。このたび、収録語数を約9万6千語に増やし、内容をより充実させ、『分類語彙表—増補改訂版—』として刊行します。(本紙15号に紹介記事があります。)

第19回「ことば」フォーラムのお知らせ

テーマ：「ことばを探す—語彙ごいの世界に遊ぶ—」

日 時：2004年2月21日(土) 14:00~16:00

場 所：国立国語研究所5階 講堂

◆内容

別の言い方をしたいのに適切な言葉が見つからないとき、どうしますか？ 従来の五十音引きの辞書はこのような場合、あまり役立ちません。言葉の意味を手がかりにして探すことができれば、効果的にほしい言葉を探し出すことができるでしょう。その目的に最適なのが「シソーラス」(類義語集)です。シソーラスとは、言葉を意味によって分類し整理したもので、表現を探すだけでなく言葉の研究やコンピューターによる言語処理にも使われています。

語の集まりを語彙(ごい)と言いますが、シソーラスはある言語で使われている語彙を一覧する総合目録のような役目も持っています。最近、国語研究所が刊行した『分類語彙表—増補改訂版—』を使って、日本語の語彙はどのような広がりや特徴を持っているのか、一緒に考えていきましょう。

◆パネリスト 神津 十月こうづ かんな

(作家)

宮島 達夫

(京都橘女子大学教授)

山崎 誠

(国立国語研究所員)



神津十月さんこうづ かんな

◆内容の詳細とお申し込み方法等につきましては、1月中旬に研究所のホームページでお知らせいたします (<http://www.kokken.go.jp>)。

◆お問い合わせ先

電話：03-3900-3111 (代表)

FAX：03-3906-3530 (代表)

電子メール：forum@kokken.go.jp

国際シンポジウムのお知らせ

国立国語研究所では、毎年、海外から研究者を招いて、日本語や言語そのものについて議論する国際シンポジウムを開いています。

平成15年度は「世界の〈外来語〉問題の多様性」と題して行います。

* * * * *

世界各地の言語社会では、それまでになかった新しい物や事柄を表現するために、その社会の主な言語(公用語や国語)の中へ別の言語から単語や言葉遣いを借り入れたり、自前で新しい単語を作ったりする様々な工夫をしています。

日本でも、古く奈良時代以前には中国から漢語を借り入れたり、幕末や明治維新の頃には西欧の言葉を漢語に翻訳する努力をしたり、現代では西欧の言葉をカタカナで表記して「外来語」として取り入れたり、そのつど色々な工夫をしてきました。

さて、世界の国々では今、言葉についてどのような工夫がされているのでしょうか？ また、その工夫から生まれた言葉は、日本語の外来語とどのような共通点や違いを持っているのでしょうか？

今回のシンポジウムでは、漢語のふるさと中国、その漢語をたくさん取り入れた韓国、かつて漢字文化圏だったベトナム、植民地時代に英語が主流だったアフリカのタンザニア、北欧で自国語を保つ努力を続けるアイスランドなどから講演者を招く予定です。それぞれの社会事情や言語事情に応じた言葉の工夫について、現状や抱える問題を紹介し合っ、互いの今後に関与する議論をするのが目的です。

日本では、以前から「分かりにくい外来語」が議論的になっています。この議論のためには、ただ日本語のことだけを考えるのではなく、他の国々の様子を知ることが役立つはずで

* * * * *

全体会 2004年3月21日(日)

会場：よみうりホール (東京有楽町)

分科会 2004年3月23日(火)・24日(水)

会場：朝日スクエア (東京有楽町)

詳しい内容や参加申し込みの方法は、1月中旬に国語研究所ホームページや雑誌・ポスターなどで御案内する予定です。

